

## 高大接続における学生の移行の多様性

松 下 佳 代・田 中 孝 平・大 野 真 理 子  
(京都大学) (京都大学) (京都大学)

武 藤 浩 子・宇 田 響・岡 田 航 平  
(早稲田大学) (くらしき作陽大学) (京都大学)

現在の日本では、大学入学者選抜を含む「高大接続のセグメント化」が顕著になっている。本報告の目的は、セグメント化の実態について、質的・量的検討を通じて明らかにするとともに、移行支援のあり方を考察することにある。本報告では、「難関大学」「大学附属高校」「ボーダーフリー大学」における学生の移行に着目し、各セグメント内及びセグメント間の学生の移行の共通性と差異を描き出した。さらに、それぞれの大学タイプで行われている具体的な移行支援の実態を比較検討することによって、異なる大学タイプに属する学生に対して、「円滑な移行」に一面化されない、適切なチャレンジを含んだ移行支援を構想していく必要性を提起した。

〔キーワード：高大接続、移行、セグメント化、大学入学者選抜、附属校、難関大学、ボーダーフリー大学〕

企画者：松下佳代・田中孝平（京都大学）

発表者：松下佳代・田中孝平・大野真理子・岡田航平・  
(京都大学)、武藤浩子（早稲田大学）、宇田響  
(くらしき作陽大学)

### 1. 高大接続と学生の移行における「セグメント化」

日本の大学は、2000年代後半からユニバーサル段階に入り、「教育接続」（入学者選抜の一点にとどまらず、高校と大学とが、教育内容・方法や学力・能力等において多面的に接続すること）が課題とされるようになった（荒井・橋本、2005）。しかし近年、高大接続の「セグメント化」という事態が現出してきた。「セグメント化」とは、「教育内容・選抜方法・学習者の社会的属性などによって高校から大学への学習者の移行パターンが細かく断片化し、多様な高大接続が並存するようになった状況」（日本学術会議、2023、p.15）を指す。

中村（2011）は2000年代以降、ユニバーサル化が進むなかで、大学入学者選抜が大きく、「エリート選抜」と「マス選抜」の2タイプに分化していったことを指摘している。前者は、選抜性が高く、主に一般入試（一般選抜）の形式をとるのに対し、後者は、選抜性が相対的に低く、主にAO入試（総合型選抜）や推薦入試（学校推薦型選抜）の形式をとる。「セグメント化」は、このような類型化が選抜形式にとどまらず〈高校教育—入学者選抜—大学教育〉というルート全体に及び、さらに細

分化・断片化している現状を表している。それは、一方で、学業水準の引き下げと学業面・生活面でのケア・サービスの充実により「大学の高校化」が進み、他方で、探究活動の高度化（SSH、SGH等）などにより「高校の大学化」が進んできたことに伴って現れている。その背後には、18歳人口の減少による入学者獲得競争や高大接続改革などがある。

セグメント化の典型は、高校在学中からの特定の大学へのルート作り・囲い込みである。これは従来、私立大学附属校において見られたが、最近では、国立大学でも同様の事態が生じている。例えば、ある国立大学附属中等教育学校では、5・6年生（高校2・3年生）対象の「高大接続コース」を設けて大学教員と高校教員が協働でカリキュラム開発を行うとともに、大学入学者選抜でも「高大接続入試」を実施するという方法をとっている。以前は、高校教育と大学教育という2つの異質な教育段階の存在を前提に、両者をいかにつなぐかが高大接続の課題であったが、現在では、その異質性よりむしろ、各セグメント間の違いの方が拡大しているとすら見える。

以上の現状認識から、本ラウンドテーブルでは、大学入学者選抜およびそれを含む高大接続について、そこでのセグメント化の実態を、「難関大学」「大学附属高校」「ボーダーフリー大学」を対象としながら、質的・量的な検討を通して明らかにする。さらにそれを通じて、移行支援のあり方も考察する。

（松下佳代）

## 2. 大学入学者選抜におけるセグメント化の実態 —全体的な傾向把握と政策動向の整理—

近年の大学入学者選抜では、各大学のアドミッション・ポリシーに基づき、受験者の資質・能力を多面的かつ総合的に評価することが求められている。しかし、各大学の特徴に応じた多様な入学者選抜を推進すると同時に、全大学に共通して導入されることが望ましいとされる選抜方法も提言されており、入学者選抜の過度な多様化に歯止めをかけようとする動きも見られる。本報告では、大学入学者選抜におけるセグメント化の実態の全体的な傾向をつかみ、近年の政策動向を概観した上で、今後のセグメント化のゆくえと課題について検討する。

まず、統計資料をもとにセグメント化の実態をつかむ。令和4年度入学者選抜における入試方法別入学者数割合（文部科学省，2023）は、一般選抜が国立大学で82.1%であるのに対し、私立大学は41.1%である。私立大学は、総合型選抜で15.7%、学校推薦型選抜で41.7%の入学者を確保しており、国公立大学のどの大学に進学を希望するかによって、主となる入試方法が変わる。そして、入試方法が変われば、個別学力検査、面接といった主となる選抜方法も変わり、さらには希望する学科系統によっても主となる入試方法は変わる。設置区分、入試方法、選抜方法、学科系統の組合せだけでも多様な入学者選抜があり、ほかにも大学の機関特性といった様々な要因が加わることで、入学者選抜のセグメント化が進行していることがわかる。

次に、政策動向を概観する。大学入学者選抜の役割・原則は、アドミッション・ポリシーに基づき、入学後の教育との関連を踏まえた上で、学力の3要素を多面的・総合的に評価することである。そのために、入試方法の多様化、評価尺度の多元化に努めるものとされている。さらに、令和5年度入学者選抜からは、より多くの者に大学教育の機会を提供するために、入試方法に、「多様な背景を持った者を対象とする選抜」が追加され、政策は入学者選抜多様化の方向性で一貫している。しかし一方では、入学者選抜で課すことが推奨される選抜方法について言及している。具体的には、記述式問題、総合的な英語力評価、主体性等評価、学力検査の教科・科目の内容への言及であり、これまで「例示」であった選抜方法が、導入が「推奨」されるものになりつつある。また、導入を促進するために、入学者選抜改革の好事例を認定・公表し、導入した大学にインセンティブを付与する動きも進んでいる。

最後に、今後も進むことが想定される入学者選抜のセグメント化の課題として、近年の政策動向は、各大学がアドミッション・ポリシーに基づき、多様な資質・能力

等を備えた学生を受け入れるという、入学者選抜の本来の役割を見失わせる可能性をはらんでいる点を指摘する。具体的には、上述した特定の選抜方法の推奨や、好事例の認定は、入学者選抜の多様化を促進する一方で、大学の特色を失わせるおそれもある。すなわち、数に限りのある選抜方法の一部を国が推奨するということは、その選抜方法を当該大学が導入することが妥当であるかどうかを各大学が自ら判断し、選択する余地を狭める可能性があるということである。また、好事例の共有自体は望ましいことであるが、好事例の認定や適用にインセンティブを与えるということは、どの事例が自分たちの大学や学生にとって適合するかを見極めることなしに、「好事例」を適用することが目的化する構造を含んでいる。誰のための「入学者選抜」なのかを、あらためて問うことが重要になるだろう。（大野真理子）

## 3. 難関大学への学生の移行に関する質的検討

「大学入学者選抜のセグメント化」が進む中、「高校のセグメント化」も顕著になっている。たとえば、「総合的な探究の時間」において、進路多様校では職業や自己の将来に関わる探究が行われる一方、進学校では純粋学問（自然科学や文学・歴史など）に根ざしたテーマに関する探究が実施されるなど、学校ランクによって探究学習の内容が多様な形で分化するようになっている（ベネッセ総研，2022）。

さらに、難関大学への進学を目指す進学校の中には、スーパーサイエンスハイスクール（SSH）やスーパーグローバルハイスクール（SGH）に指定されてきた高校が多く存在しており、このような高校では、探究学習の方法論も高度化している。より具体的に述べれば、これらの高校では、高度な実験や国際的なフィールドワークなど、本来大学や大学院で学ぶような方法論や考え方を先取りのように学ぶことが目指され、「高校の大学化」と形容される状況が起きている（田中，2022）。

本研究では、高校で探究学習を経験した学生が難関大学における学びへどのように移行しているのかという実態について、関心分野・方法論上の接続の視点から検討する。このような検討を通して、難関大学における移行支援のあり方を捉え直すことが本研究の目的である。そのために、高校で探究学習を経験した後、難関大学である総合研究型大学A大学へ入学した10名の学生を対象として半構造化インタビュー調査を実施し、学生間で共通してみられた特徴的な移行経験を描き出した。

分析の結果、まず関心分野に関して、多くの学生が、高校時代の探究テーマと大学の正課教育及び正課外活動における学びの関連を指摘し、高校時代から続く自身の関心分野を連続的に拡張させていく様子を浮き彫りにし

た。それに対して、高校時代の関心を大学でも連続的に拡張させることへの悩みを抱えながらも、それによって自身の関心分野を鮮明化した学生の姿も示した。

次に方法論に関して、レポートライティングやプレゼンテーションなどアカデミックスキルの活用という点で、高校・大学間には連続的な接続がみられることが示された。一方、工学部・薬学部に属する2名の学生は、大学1年次から3年次において、高校の探究学習のように自ら問いを立て、実験を行い、考察するという一連の研究的な学習をほとんど経験しておらず、方法論上の非連続性が示された。このような方法論上の非連続性は学生の不満につながる懸念されるが、A大学の工学部の一部学科と薬学部では、希望した学生に対して、低年次から研究体験ができるような選択的な機会が確保されていた。

以上の検討を通じて、関心分野・方法論という2つの観点において、学生は連続性と非連続性を経験していることが示され、非連続的な経験によって生じる葛藤や課題によって、学生が成長する可能性を示した。また、これらの葛藤や課題などに対して「学生の声」を軸とした移行支援の方向性を示すことによって、「円滑な移行」に一面化された従来の移行支援のあり方を捉え直した。

(田中孝平)

#### 4. 附属高校生の学習経験—大学進学ルートに着目した分析—

大学附属高校から、いわゆる「内部推薦」で私立大学に進学する生徒は、学校推薦型選抜入学者の14%以上を占めるまでになり、この「内部推薦」を含むセグメントは存在感を増している。また、近年、内部推薦制度を持つ大学附属校の人气が高まっている様相も見うけられる。しかしながら、その内部推薦が、附属高生の学習や意識に与える影響を検討した実証研究はほとんどない。

そこで、本研究では、附属高校の生徒が希望する大学進学ルートが、生徒の学習行動や意識にどのような影響を与えるのか検討する。ここでいう大学進学ルートとは、

①高校入学時に内部推薦で系列大学に進むことがほぼ確定している「推薦（全入）ルート」、②高校での内部選抜を経て内部推薦で系列大学に進む「推薦（選抜）ルート」、③他大学等の一般選抜を経て大学に進む「一般入試ルート」である。分析対象とするのは、難関とされる私立B大学の附属・系属高校6校の生徒（4,081名）への質問紙調査データである。

沈・武藤（2022）は、同データを用いて、大学進学ルートによって学習時間の様相が異なることを明らかにしたが、本稿では、生徒の意欲や、授業へのエンゲージメント、高校満足度について分析した結果を示す（以下

の括弧〔 〕には、肯定的に回答した生徒の割合（％）を学年毎に示している）。

##### (1) 生徒の意欲

どのルートを希望する生徒も、興味や関心があることには意欲的に取り組んでおり、生徒の意欲については大学進学ルートによる差はほとんどない。

##### (2) 授業へのエンゲージメント

授業へのエンゲージメント（授業で意見を言う）は、1年次にはそれほど差が無いものの、学年が上がるに従って大学進学ルートによる差異が見られた。まず、推薦（全入）ルートの生徒は、学年が上がるに従ってエンゲージメントが多くなる傾向がある〔54.8→61.3→68.8〕。推薦（選抜）ルートの生徒は、どの学年においてもエンゲージメントはある程度多い〔65.4→58.6→58.6〕。他方、一般入試ルートの生徒は、学年が上がるにつれて、エンゲージメントが少なくなる傾向が見られた〔59.8→49.3→32.4〕。

##### (3) 高校満足度

推薦（全入）ルートの生徒の高校満足度は高く、学年による差はほとんどない〔86.3→85.3→85.5〕。推薦（選抜）ルートの生徒も、どの学年においても満足度はある程度高い〔77.5→76.6→73.5〕。他方、一般入試ルートの生徒は、1年生の時から満足度はそれほど高くなく、3年生になると下がる傾向が見られた〔57.8→61.9→51.8〕。生徒が希望する大学進学ルートによって、高校満足度は大きく異なる。

本研究では、生徒が希望する大学進学ルート（大学側から見ると入学者選抜方法）が、学習時間だけでなく、授業へのエンゲージメントや高校満足度にも影響を与えていることを明らかにした。私立大学附属校においても、生徒の大学への移行は決して一様ではなく、希望する大学進学ルート（選抜方法）によってセグメント化しているといえよう。

(武藤浩子)

#### 5. ボーダーフリー大学への学生の移行に関する量的検討

ボーダーフリー大学（「受験すれば必ず合格するような大学、すなわち、事実上の全入状態にある大学」（葛城，2018，p.108））と呼ばれる大学は、これまで十分に研究対象とされてこなかった。そのため、本研究がアプローチするボーダーフリー大学への学生の移行実態についても、十分な知見が蓄積されていない状況にある。

そこで本研究では、まずボーダーフリー大学への学生の移行実態に関する基礎的情報の整理を行う。具体的には、『大学の真の実力 情報公開BOOK』（2022・2023年度用，旺文社）に掲載されたデータをもとに、定員充足率によって、一般選抜（以下，一般）、総合型選抜

(以下、総合型)、学校推薦型選抜(以下、推薦型)といった入試を経て進学した者の割合は異なるのかを整理する。その結果、例えば社会科学系学部では、①定員充足率が下がるほど、一般を経て進学した者の割合が低くなること(定員充足率80.0%未満(22.3%), 80.0%以上100.0%未満(30.4%), 100.0%以上(37.3%)), ②定員充足率が下がるほど、総合型を経て進学した者の割合が高くなること(定員充足率80.0%未満(25.4%), 80.0%以上100.0%未満(19.1%), 100.0%以上(13.1%))などが明らかになった。

続いて、ボーダーフリー大学に所属する学生の学習行動について「入試形態別」に検討を行う。具体的には、ボーダーフリー大学に位置づく私立大学(C大学、D大学)の社会科学系学部所属する2年生・3年生のアンケート調査のデータ(N=183)をもとに、一般(センター試験利用入試を含む)、総合型、推薦型といった入試形態によって、高等学校・大学での過ごし方は異なるのかを検討する。なお、同じボーダーフリー大学に位置づく大学であっても、そこに所属する学生の学習行動は異なる可能性があるが、サンプル数の関係上、C大学、D大学をまとめてボーダーフリー大学とし分析を行っている。

高等学校での過ごし方に関する分析の結果、高校3年次の平日一日の授業外学習時間が「0分」である学生の割合は、一般で11.8%であるのに対し、総合型で33.3%、推薦型で33.9%にも及んでいることが明らかになった。

大学での過ごし方に関する分析の結果、平日一日の授業外学習時間が「0分」である学生の割合は、推薦型で20.3%、一般で25.5%であるのに対し、総合型で39.7%にも及んでいること、また、高校時代から継続して授業外学習時間が「0分」である学生の割合は、一般で7.8%、推薦型で16.9%であるのに対し、総合型で25.4%にも及んでいることが明らかになった。なお、こうした結果は、大学・学部が掲げるアドミッション・ポリシーによって変わり得る可能性があることには留意された。というのも、どのようなアドミッション・ポリシーを掲げているのかによって、特に総合型を経て進学してくる学生の質に違いが生じる可能性があるからである。

以上の知見をふまえ、特に総合型を経て進学した学生に対しては、知識・技能を獲得させる上で、その獲得を支える「学習習慣」を身につけさせるような移行支援が必要だと指摘した。(宇田響)

## 6. ボーダーフリー大学への学生の移行に関する質的検討

高大接続が大学教育を取り巻く論題となって久しい。

一方、従来の研究や議論では大学入試前や大学入学後が着目され「大学合格から大学入学までの期間」には焦点が当てられてこなかった。また、高大接続の前提である高校生の実態に関する議論が不足しているなど(山村・濱中, 2019)、高大移行期における高校生の「個人の経験」への理解も欠如している。特に、大学への移行が困難で脆弱な存在として大学生が取り扱われてきたボーダーフリー大学では、彼らの移行経験を詳らかにすることが求められよう。果たして高校生はどのように大学合格から大学入学までの期間を経験しているのだろうか。

そこで本報告では、高校生の経験を垣間見る分析視角として「入学前教育」に着目する。具体的には私立X高校から私立E大学に入学した高校生10名を対象に、入学前教育の前後に実施した縦断的インタビューで得られたデータを分析する。これらの分析を踏まえて、入学前教育を介した高校生の移行経験の多様性を詳らかにするとともに、ボーダーフリー大学で求められる移行支援や入学前教育のあり方を検討することが目的である。

分析の結果、第一に、入学前教育が大学生になるための準備・心構えを促す象徴として高校生に経験されていたことがわかった。具体的には、入学前教育の進捗に伴って準備・心構えが進んでいくことが語られた。第二に、高校生の大学や将来に対するイメージと入学前教育の内容が結びついた場合、高校生は入学前教育の内容に拘らず、主体性を持って積極的に入学前教育に取り組んでいることが示された。例えば、公務員試験を想定した補習教育への肯定や、商社勤務を想定した経済系の課題図書への肯定が語られた。第三に、高校生は大学という新たな環境に飛び込むことに不安を感じており、その不安を解消し得るものとして入学前教育に期待を抱いていることが窺えた。具体的には、入学前教育のガイダンスを通じて、先生や友達との交流機会を得たことが不安の解消につながっていることが語られた。第四に、入学前教育の経験が一部の高校生に対して葛藤や戸惑いといった心の「揺らぎ」をもたらしていることが示された。例えば、保育士・幼稚園教諭を志す高校生Aが、課題図書レポートの経験を通じて、自身の進路選択への不安や葛藤を感じている様子が語りからは示唆された。

これら入学前教育に関する検討から、総合考察として、第一に、ボーダーフリー大学における「高(大)社接続」といった現状が窺えた。換言すると、大学は将来や卒業後の就職へのあくまで通過地点という高校生の認識が垣間見えた。第二に「円滑な移行」を志向することの妥当性を問う必要性を指摘した。これまで高校から大学への移行支援を前提とした教育活動では、高校生の抱く不安や心の揺らぎをなるべく取り除こうとする傾向にあったのではないだろうか。大学における学びや生活、

強いのは大学の在り方を問い直す上でも、不安や心の揺らぎの経験が高校生・大学生に及ぼすポジティブな影響について検討することが求められよう。（岡田航平）

## 7. ラウンドテーブルにおけるディスカッション

ディスカッションでは、各報告に対する個別の質問（入学者選抜の好事例集認定の功罪、入試区分による授業外学習時間の違いの解釈など）と全体への質問が参加者から向けられ、それらに答える形で議論が展開した。

本稿において、各報告に対する個別の質問内容とその応答をすべて取り上げることは、紙幅の都合上難しいため、個々の質問内容の趣旨を踏まえ、企画者・報告者から提示された今後の展望をまとめることにしたい。

全体に対する質問として、「大学の高校化」に墮することのないアプローチのあり方とはどのようなものかという質問が出された。これについては、ミネルヴァ大学（Minerva University）の先進的な事例を踏まえつつ、大学らしい学業水準と、ケアやサービスの充実（メンタルヘルスやアカデミック・アドバイジングなど）を両立する形でのアプローチの可能性が報告者から提案された。また、難関大学への移行は「研究」を軸としているのに対し、ボーダーフリー大学への移行は「就職」を軸としているというセグメント化の実態を踏まえ、各大学は独自の対応をとるべきなのではないかという議論もなされた。

さらに、各報告では「高大接続のセグメント化」の実態を踏まえた具体的な移行支援の提示までを行うことはできなかったが、フロアとのディスカッションを通じて移行支援の方策を検討する際の論点が明らかになった。

まず、ボーダーフリー大学における具体的な方策の検討のあり方である。報告5では、ボーダーフリー大学への移行に関して、高校での学習習慣が大学にも引き継がれることから、大学で新たに学習習慣を作るための支援方策の必要性が提起された。これに関連して、報告6では、ボーダーフリー大学の一部で、入学前教育など手厚い支援が行われていることが示された。学習習慣の形成という観点から、大学側の移行支援をどのように構築すればよいのかという点が鍵を握るといえよう。

一方、こうした手厚い移行支援は、学生の「円滑な移行」を促すものの、学生自身が移行に伴う不安などを自ら乗り越える機会を失わせるかもしれない。これについて、報告3では、学生が葛藤や課題を乗り越えることによって成長する学生の姿も提示された。これらの点も踏まえ、それぞれのタイプの学生にとって適切なチャレン

ジとはどんなものなのか、適切なチャレンジを含み込んだ移行支援をどのように構築することができるのか、その諸条件を解明していくことが引き続き検討すべき重要な論点となる。（田中孝平・松下佳代）

## 参考文献

- 荒井克弘・橋本昭彦編（2005）『高校と大学の接続―入試選抜から教育接続へ―』玉川大学出版部。
- ベネッセ教育総合研究所（2022）「小中高校の学習指導に関する調査2022」(<https://berd.benesse.jp/sho-touchutou/research/detail.php?id=5812>)（2023年7月22日）
- 葛城浩一（2018）「多様化した学生に対する大学と教員―「ボーダーフリー大学」に着目して―」『高等教育研究』21, 107-125.
- 文部科学省（2023）「令和4年度国公立大学入学者選抜実施状況」([https://www.mext.go.jp/content/20230123-mxt\\_daigakuc02-000027141\\_03.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20230123-mxt_daigakuc02-000027141_03.pdf))（2023年7月11日）
- 中村高康（2011）『大衆化とメリトクラシー―教育選抜をめぐる試験と推薦のパラドクス―』東京大学出版会。
- 日本学術会議 心理学・教育学委員会 高大接続を考える分科会（2023）「日本における高大接続の課題―「セグメント化」している現状を踏まえて―」。
- 田中孝平（2022）「高校・大学間における教育接続タイプの特徴」『大学教育学会誌』44(1), 150-159.
- 沈雨香・武藤浩子（2022）「私立大学附属・系属高校生徒の学習に関する研究―大学進学ルートの違いに着目して―」『早稲田教育評論』36(1), 71-86.
- 山村滋・濱中淳子（2019）「なぜ、「高校生の学習行動」なのか」山村滋・濱中淳子・立脇洋介編『大学入試改革は高校生の学習行動を変えるか―首都圏10校パネル調査による実証分析―』ミネルヴァ書房, 1-16.

## 謝辞

1の研究はJSPS 科研費JP22H00965, 2の研究はJSPS 科研費23KJ1269, 3の研究はJSPS 科研費22KJ1740の助成を受けたものである。また、4の報告は、早稲田大学教育総合研究所研究部会「グローバル時代における高大接続に関する研究：大学附属校・系属校を対象として」（研究代表者：吉田文）の研究成果の一部である。

## Diversity of Student Transitions in High School-University Articulation

Kayo Matsushita, Kohei Tanaka, Mariko Ono,  
(Kyoto University) (Kyoto University) (Kyoto University)

Hiroko Mutoh, Hibiki Uda, Kohei Okada  
(Waseda University) (Kurashiki Sakuyo University) (Kyoto University)

In Japan today, the “segmentation of high school-university articulation,” including the admission processes for university entrants, is becoming increasingly prominent. According to a report by the Science Council of Japan’s Subcommittee on High School and University Articulation, “segmentation” refers to a situation in which the transition patterns of students from high school to university have become finely fragmented based on educational content, admission methods, and social attributes of learners. Various types of articulation between high schools and universities coexist. However, the report does not delve into specific cases of transition.

The purpose of this roundtable report is to elucidate the actual state of segmentation of high school-university articulation through qualitative and quantitative research and to consider how transition support should be provided. This report focuses on the transition of students from high school to university in an elite university, six high schools affiliated with one elite university, and two open-entry universities. It depicts the commonalities and differences in student transitions within and across segments. One finding is that the transition to an elite university focuses on research, while the transition to an open-entry university emphasizes employment. Furthermore, by comparing the actual situation of specific transition support provided at each type of university, we highlight the need to envision transition support that provides students with opportunities for appropriate challenges, rather than solely focusing on a “smooth transition” as has been the approach in the past.

**Keywords:** High School-University Articulation, Transition, Segmentation, University Admission, University-Affiliated High School, Elite University, Open-Entry University